

## 千手〈ちで〉の松（南淡町賀集）

天承元年（一一二六年）の夏は、毎日毎日かんかん照りの暑い天気がつづきました。そのため、田畑の作物はすっかりしおれて、日本国中がかんばつになやまされました。

そこで、妙松院竜尊上人〈みょうしょういんりゅうそんしょうにん〉が雨乞のお祈りをして、めぐみの雨をいただくよう、鳴門海峡で七日間のお祈りをいたしました。

丁度七日目、満願の夜半に波間にピカ、ピカと光るものがあります。不思議に思って近づき拾い上げてみると珍しい小箱でありました。

おそろおそろ開いてみると、竜王と本地救世の観世音ぼさつの尊像であったのでびっくりして、なおーそうお祈りをつづけると、とつぜん大つぶの雨が滝のように降ってきました。

上人は、「有難や、有難や、これでお百姓さんが助かるぞ。」と、たいへんよろこびました。

そこで、小箱の尊像をもちかえり、お祭りしようと考えましたが、自分の肌身〈はだみ〉にふれればおそれおおいと思って、近くの岩に生えていた小松をひきぬいて背中にあて、小箱を背負って帰り、南淡町賀集野田の地をひらいて、小さなお堂を建てて、もち帰った尊像をおまつりし、庭先にその小松を植えて、竜松千手の松と名前をつけました。

その後、応永〈おうえい〉の頃、観山法院というお坊さんが、その年も大かんばつでお百姓さんが困っていたので、昔のいわれにならって、この千手の松に湯の花を捧げお祈りをいたしますと、たちまち大雨が降って靈験あらたかなることがわかり、すべての住人は大いに喜んだということです。

それからは、毎年六月十七日に松の木の下で、湯立神楽〈ゆたてかぐら〉の祭りを行なうようになりました。

大正十五年二月二十四日、天然記念物の指定を受けました。

樹令八百年を越えますが、霊松として住民の尊敬と愛撫〈あいぶ〉をうけて、今でも緑あざやかに偉容堂々としています。

幹の周りは八メートル、高さ十八メートルあり、枝葉のひろがり、東西三十一メートル、南北三十四メートル、実に見事な姿であります。

